

### 三塗の黒暗開くなり

一、法蔵の心を頂いて

甲「先生、私は心が暗くてなりません。どういたしたらいいのでしょうか。」

乙「何で暗いのですか。」

甲「私の所には、働いてくれない人間を二人ほど、それもある事情で余儀なくおいていますが、いつもそのために心が暗くなるのです。」

乙「貧しい上に、そうした人をかかえて、より苦しいことだと思えます。だが考えてください。あなたの子ども衆でしたら重荷を感じますか。」

甲「いいえ、それはどんなに苦しくても重荷ではありません。」

乙「では重荷である前に、あなたの愛の不足です。愛は一切の重荷を重荷と感じさせません。何か事情があることでしようが、仕事については指導もし、あるいは他に求めるなりして、それまでを心を入れてお世話してあげなさい。法蔵菩薩のみにかえりましょう。『仮令身を諸の苦毒の中に止くとも……忍んで終に悔いじ』幾回も幾回も頂いていると、私がどうすればいいかがわかります。重荷でしょうが、じつと持ちつづけられてください。」

甲「ありがとうございます。私の心が狭かったのです。お世話させていただきま

二、褒貶を超える道

甲「私は心が暗いのです。どうかしてくださいませ。」

乙「何で心が暗いのですか。」

甲「私はありません。どうして人に疑われて、世間に悪評が広まったのです。」

乙「そうでしたか、お苦しいでしょう。だが考えてみましょう。太陽にだつて雲がかかります。聖者だつて誤解されました。そのために無意味の刑罰すら受けた方がたくさんであります。誤解した方は人格の傷になりますが、された方は、そのことのためにかえつて身を謹み、弁解もせず、にくしみをも超えて歩んで行けば、それがかえつてあなたを真に生かすことになります。誤解よりもあなた自身がどんなに歩んだかということが問題であり、あなた自身の真価が何であるかが問題です。信念ですね。こんなことはあなたばかりではありません。私の方がもつとく大きく誤解されているかも知れません。私もあなたのように苦しみました。だが今は、あまり苦しまなくなりました。それよりも私は、み仏のみに名をあげたらいい、み仏に知っていたただくだけで生きてゆかれる世界を少し知らされました。そしてどんな声も私を真に生かしてくださるのだということがわかりました。

『我が袖の玉とつつみて拾わばや

うちつけられし石も瓦も。』 行誠上人

この歌をしみじみお味わいください。何を受けても損にはならない生きた尊い人生がわかりますから。」

甲「ありがとうございます。心得が違っていました。」

三、幻を追う者

甲「先生、私は苦しいのでございます。生きるのがいやになりました。」

乙「それはまたどうしてです。」

甲「私は兄がありまして、その兄が………そんなことで、どうしても、私の思うことができないのです。私は友のごとく出て行って身を立てようと思っても、それもできません。私は泣く泣く田舎で朽ちなくてはならないのです。生きても生甲斐はありません。」

乙「ずいぶん長いお話を聞きまして、いちおうはご同情いたします。だが聞いていると、あなたにはこうした間違いがあります。」

(1) あなたは、街という所には無条件に幸福というものが待っている、と考えている大間違いが一つ。

(2) あなたは家庭にいることは大不幸で、家から出さえすれば、どんな幸福でも待っている、と思つてゐる間違いが一つ。

(3) 思うようにならぬという愚痴、あなたが何でも思うようになったらどうでしょう。それこそたいへんです。暑い夏に、寒くなれと思つたら寒くなり、寒い冬に、暑くなれと思つたら暑くなつたのではたまらない。各人がそれぞれ思う所が違ふのに、それがみな皆思うとおりになつたらこの世はめちゃくちゃになつてしまふではないか。甲の処では乙がよく見え、乙の処では甲がよく見えます。しかしいづれに行つて見ても、どこも同じ秋の夕暮、生死火宅よりほかありはしません。世<sup>2</sup>の中には家にいたくてたまらないという愚痴をもつて来たつて仕方がない。それが勝手だ。我慢だ。あなたの勝手ゆえにあなたの手が呪わしくなり、罪もない兄弟までが、あなたにはつごうの悪い存在となり、やがては反逆心となる。家庭におつてさえ、食うに困らぬ家庭にあつてさえ、生ききれないあなたが街に出たつて仕方がない。一切が錯覚やら、認識不足やら、勝手やらから生まれた苦しみです。

(4) 兄様に対する同情がたらない。今聞いてつくづく不幸である兄様に同情します。その暗い運命に泣いて今の兄様になられたのです。深い妹としての愛が蘇つた時、もつともつと、兄様のよい伴侶となつてあげることができると思ひます。あなたは、はるか彼方の幻を追うているために、足もとの一切が見えていないのです。今流している安価な自己本位の涙を、もつと如来の智慧光によつて深められて、力強く現実の中に生ききりなさい。今のままの中に浄土の光は拝せられます。」

四、三塗の黒暗開くなり

甲「先生、私はどうしてもこの心が聞いてくれません。苦しくてたまりません。お聞かせください。」

乙「どんなことがわかりませんか。」

甲「お問ひすることすらできません。ただまつくらです。」

乙「如来は実在しますか。」

押「それは疑いません。」

乙「あなたは仏を殺しています。」

甲「殺してはいません。」

乙「あなたに殺されるような仏ではない。しかしあなたは無視している。殺している。」

甲「それはまたどうしてです。」

乙「あなたのその相がそれです。仏はいつたい何していられるのです。活きた仏なら生きてはたらいっているはずです。生きてはたらいっているならば、あなたをはなれて、どこにおはたらきになります。私にはあなたの上に生きたもう仏を拝されません。」

甲「それならなぜ私はこうも暗いのでしょうか。」

乙「それは当然のことです。今まで本気になって聞きもせず、求めもしなかったあなたが、一度本気になって聞き、求め、考えはじめると、自己凝視がはじまります。するとそこに、新しいいやなもの生まれはじめ。こうまで精神的な病人ではなかったはずです。しかるに、見れば見るだけ、墨のように暗い、とつてつけたのも、人からうつされたのでもない。あなた自身の真相です。おそれることなく、その闇に、煩惱に、もつともつと深くふれて徹してゆきなさい。何かでごまかしてはいけません。」

甲「私は確かにごまかしていました。きれいな節のついたお説教がすきでした。ですが、それを聞いて酔うていた私は、救われたのでなくて、一時的に麻酔にかかっていたのです。先生のお話を聞くと、いつも内へ内へとさそいこまれるようで、闇が見えてくるようで、いやでした。ですが、私は今までたいへんな間違いであつたことに気がつきました。私はもうそんな麻薬にはかかりません。救いきられるまで求めます。」

乙「それはよいことに気がつきました。おそれてはいけません。内に何が出てこようと恐れてはいけません。大胆に強く、あなた自身を知ることです。いちばん困難なことは、自分を知ることです。病気になる時、ああ病気であるとは思いません。病気を忘れよう忘れようと、いろいろなことでごまかしていたのでは病気は治らない。真に病気を知りつくして、はじめて安住も生きる道もあるのです。」

甲「でも私は刻一刻、闇におちます。」

乙「おちるならおちなさい。」

甲「それがいやです。お救いください。」

乙「そんな救いは知りません。おちまいともかくあなたが自力です。我慢です。救われない道です。あなたは生まれた時、何をもって生まれました。まる裸だったのです。小学校女学校と勉強し、やがて奥様という肩書がつくと、ふらふらと羽根がついて浮かれ出し、あなたの家や、持ち物や、主人の肩書や、家柄や、世の人のお世話や、権利や、そんなやくざなものを自分だと思いはじめ、まったくあなた自身の正体を忘れたのです。今の今、そんなものが何になります。とうぜん、あなたはあなた自身の真価を知らねばならなくなったのです。おちまいとしてもだめです。」

徹底的な自己清算を仏はせまります。あなたに、悪と、愚と、我慢と、それ以外の何があります。五逆誹謗のあなたが見えないのです。みな無間大地獄です。もとのすがたに帰りなさい。」

甲「苦しい……………」

乙「親鸞聖人は何ゆえに愚禿と名告られたのでしよう。しかるにあなたは善人だと名告りたいのです。智者だとうぬぼりたいのです。源信和尚の聖者にして、なおかつ極重悪人と諦観したのに、あなたは善人だと言いたいのです。悪、いよいよ重くして、ますます善人顔をし、愚、いよいよ深くして、ますます賢いとうぬぼれ、我慢、病いよいよ膏肓に入つて、ますます有頂天の重きに人を見下げ、われをば一点誤りのない君子人のごとく考えて、人を裁くこといよいよ急、かくしてあなたは、自己を知らず、如来を知らず、ナンセンスな今を空費するのです。」

甲「それが私の正体です。」

乙「しかもそれが、かく言っている私の正体です。」

甲「先生の？ほんとですか。」

乙「如来はその智慧光によつて、われの正体、十悪五逆を照破して、下品下生の凡夫に落在せしめ、自力無効を宣言し、信知せしめ、それによつて、如來自身をわれの上肯定して、三塗の黒暗を開いて浄土の広大に遊ばしめるのです。如来を拝すること、聞くこと、その帰命の信まことなれば、まことなるだけ、そこに生まれるものは、三毒五欲の機であります。」

甲「ああ！ ああ！ そうでございましたか。そうでございましたか。」

乙「不思議や、十悪五逆の諦観、ありのままの自己を凝視して、そこに千古の安らぎと、よろこびはある。南無阿弥陀仏、われに生きます。凡夫を改造して如来たらしめるのではなくて、如来還相して、われに生きたもう、仏凡一体の境がそれであります。寸毫もわれにおいて加える所はないのです。」

甲「ありがとうございます。私のこの心申しあげようもございません。」

乙「これまでと卒業してしまおうとしたのが、これからいよいよ頂くのです。涅槃経には『涅槃を食となす』とあります。み法を食物として生きてゆくのであります。」

甲「私は私のこれまでの一切が間違っていました。いつまでもいつまでもお導きくださいませ。」

## 五、殻をつかんで

甲「先生、私は如来様はこのまま救ってくださいると信じています。少しも疑いませぬ。救われた上は報謝の称名だけだと思つています。これでどうでしょうか。」

乙「信仰でも仏教でもない。」

甲「なぜです。」

乙「疑わないと言うあなたが『これでどうでしょうか』とは何事です。それが疑いです。あなたは何年寺へ参りましたか。」

甲「約十五年です。」

乙「十五年かかつて、生命の流れていない殻を拾つたのです。」

甲「困りましたね。そんなにやられましたは。」

乙「もつとお困りなさい。」

甲「カンジン要をたつた一口教えてくれませんか。」

乙「信仰は生命道であつて、商売ではありません。その功利的なあなたの態度ではつける薬がありません。」